

令和3年度 事業計画及び収支予算

血液事業特別会計



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

1. 令和2年度 主な取り組みと今後の課題

(「日本赤十字社長期ビジョン」に基づく戦略項目の取り組み)

項目	目標	今後の方向性・課題
新型コロナウイルス感染症への対応	<ul style="list-style-type: none"> 必要血液量の安定確保 血液製剤の安定供給 献血者や職員の感染防止対策の徹底 	<ul style="list-style-type: none"> 「新しい生活様式」の定着に伴う社会構造の変化を踏まえた新たな献血推進体制の確立
血液製剤の安全性・品質向上に向けた弛まぬ努力	<ul style="list-style-type: none"> 輸血副作用の発生数の減少 	<ul style="list-style-type: none"> 細菌感染リスク低減策の更なる検討 PAS血小板製剤の開発
献血協力者への新たなアプローチ	<ul style="list-style-type: none"> 献血者が医療に貢献できていることを実感できている仕組みの構築 	<ul style="list-style-type: none"> 献血の意義と社会への貢献が実感できるような広報展開 献血者のカテゴリに合わせた協力依頼方法の確立
新たな事業展開と持続可能な事業基盤の確立	<ul style="list-style-type: none"> 既存事業を補完できる新たな事業の展開 医療機関での血液製剤の使用状況に応じた献血依頼・献血受入が可能な体制の構築 	<ul style="list-style-type: none"> バイオリソース、ビッグデータの活用を通じた国民の健康増進への貢献 輸送体制の合理化と利活用
造血幹細胞事業の推進	<ul style="list-style-type: none"> 造血幹細胞移植を希望される方の移植率の増加 	<ul style="list-style-type: none"> 事業の一層の普及推進
各国の血液事業の発展への貢献	<ul style="list-style-type: none"> 日本赤十字社の支援によって達成できている活動内容・成果の国内外への明示 各国の技術レベルを超えた交流支援の継続 	<ul style="list-style-type: none"> 発展途上国に対する技術支援研修の実施及び体制の確立 ニーズを反映した海外研修生の受入

2. 令和3年度事業計画の主な取り組み

収益的収入/支出 1,649億円/1,617億円（血液事業特別会計）差引額 31億円

(1) コロナ禍における必要血液量の確保対策

(2) 新型コロナウイルス等の感染症に対応した広域事業 運営体制の検討

- 事業環境の変化を踏まえた献血推進方策の確立
- 都道府県の枠組みを超えた広域的な献血推進体制の検討
- 献血予約の一層の推進

(3) 供給部門における体制・業務の見直し

- 新たな血液製剤発注システムの利用促進
- 血液製剤の定時配送体制の確立

(4) 血液製剤の安全対策の実施

- 血小板製剤の安全性の向上に向けた対応
- 赤血球製剤の有効期間延長に向けた対応

(5) 造血幹細胞事業の推進

- 公開臍帯血数の増加に向けた臍帯血の調製基準等の見直し

(6) 国際協力・海外交流の実施

- 海外協力関係の継続に向けた各国の現状に関する情報の収集

(7) 新たな事業の展開

- 新型コロナウイルス感染症治療への協力
- 国民の健康増進に向けた献血血液に関する情報の公開

(8) 事業の効率的運営の推進

- 業務のあり方の抜本的な見直し

3. 令和3年度事業計画のハイライト

- (1) コロナ禍における必要血液量の確保対策
- (2) 新型コロナウイルス等の感染症に対応した
広域事業運営体制の検討
- (3) 供給部門における体制・業務の見直し



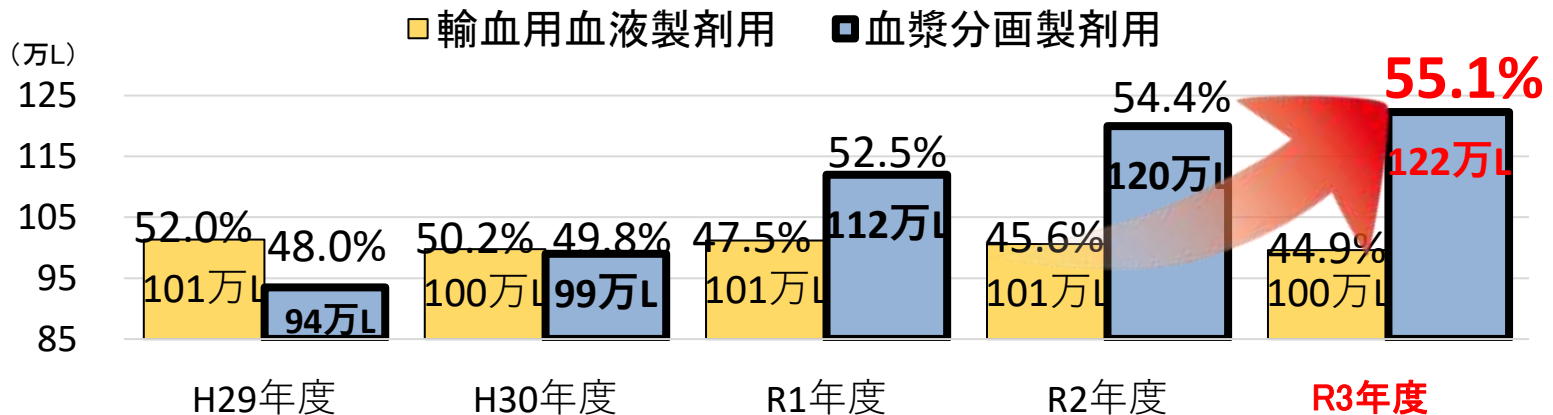
(1) コロナ禍における必要血液量の確保対策

(2) 感染症に対応した広域事業運営体制の検討

ア 背景・目的

- 「新しい生活様式」の定着による事業環境の変化
(在宅勤務やオンライン授業の定着による企業・団体献血の変容)
- 血漿分画製剤の需要増加に伴う必要血液量の増加
(免疫グロブリン製剤の需要増加)
- 更なる新興感染症への対応の必要性

【献血血液の確保計画量の推移】



【参考】 血液製剤の種類

血液製剤とは、人の血液を原料とする医薬品であり、

「輸血用血液製剤」と「血漿分画製剤」に大別され、

献血された血液は成分に応じて、それぞれの製剤の原料として、活用される

【分画】

血漿中の100種を超えるタンパク質を
物理化学的に各々の成分に分けること

【血漿分画製剤】

血液中の血漿から、
治療に必要な血漿タンパク質を
種類ごとに分離精製した医薬品



製造工程のイメージ



製剤のイメージ

医療需要に応じた必要血液量(222万リットル)を確保するために、年間499万人の献血協力が必要

献血者 **499万人**

【全血献血】200mL献血:9万人、400mL献血:326万人
【成分献血】血漿成分献血:107万人、血小板成分献血:57万人



血漿分画製剤用
122.3万L

輸血用血液製剤用
99.6万L

血液センター

ブロック血液センター: 献血血液の検査、輸血用血液製剤の製造
赤十字血液センター: 輸血用血液製剤の供給



血漿分画製剤用原料血漿
123.5万L
(在庫調整分1.2万L含む)



赤血球製剤
636万本



血漿製剤
211万本



血小板製剤
881万本

計1,727万本

製剤本数は200mL献血由来を1本とした換算数

国内製造メーカー



医療機関



イ 施策の概要

(ア) 事業環境の変化を踏まえた献血推進方策の確立

- ・在宅勤務やオンライン授業を前提とした献血受入計画の策定
- ・都市部における献血ルームを中心とした献血受入体制の充実
- ・企業からの献血協力の新たな形態の確立及びその実践

☑ 複数団体を組み合わせた献血バス(移動採血)の稼働



献血バス

A社での協力者:50名



複数の団体からの
協力確保への移行

A社での協力者:25名
B社での協力者:15名
C社での協力者:10名

50名

☑ 献血者の居住地周辺の献血会場への誘導



献血バス



中止会場の献血予定者や、
在宅勤務中の献血者を中心に誘導



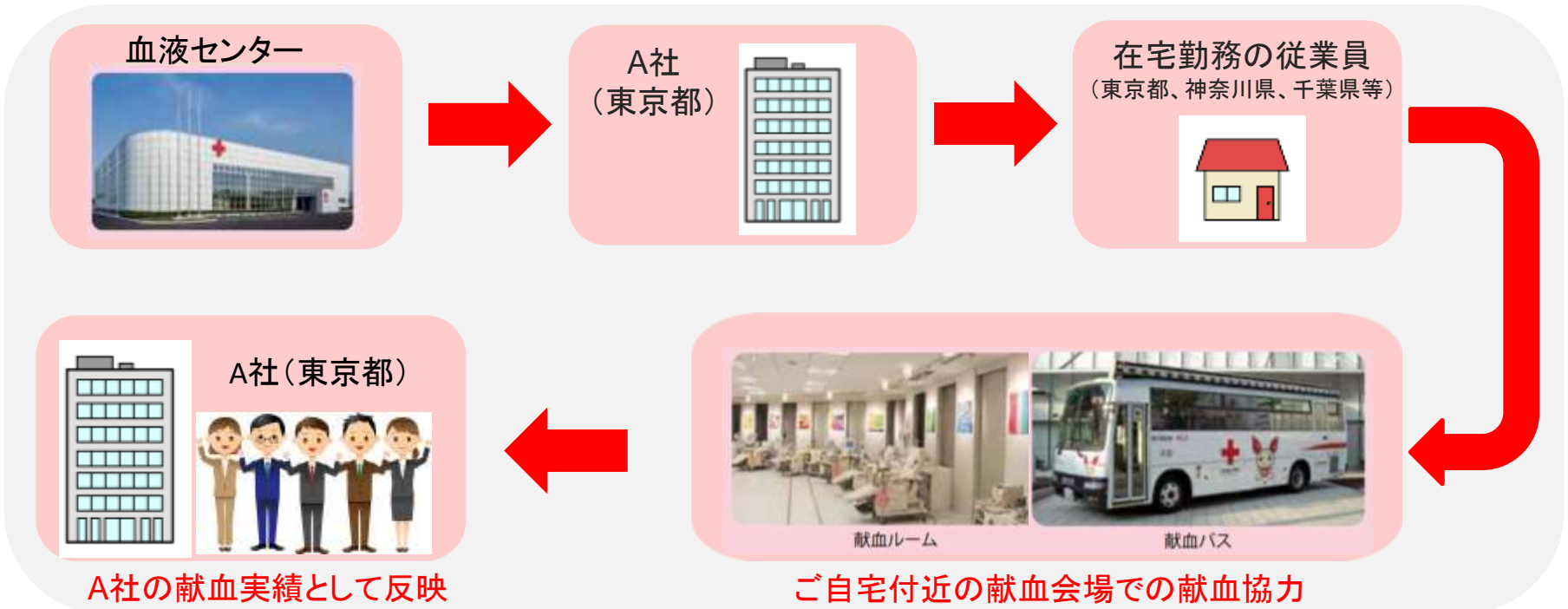
献血ルーム

⇒事業環境の変化に対応しながら、必要血液量の安定確保を目指す

(イ) 感染症に対応した広域事業運営体制の検討

- ・ブロック血液センターと管内地域血液センターの連携強化
- ・都道府県の枠組みを超えた広域的な献血推進の連携
- ・医療機関との連携強化に向けた学術情報・供給部門の役割の見直し

☑ 都道府県の枠組みを超えた広域的な献血推進の連携



⇒ 感染症のまん延時も、安定的な事業運営が可能な体制の検討を進める

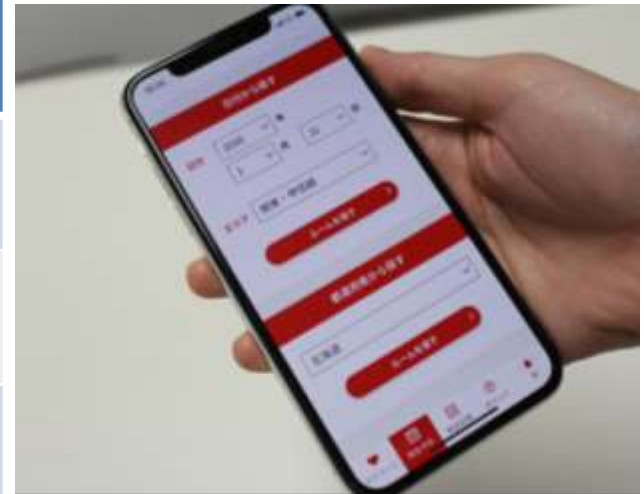
(ウ) 献血予約制の推進

- ・ 献血WEB会員サービス「ラブラッド」の活用
- ・ 献血者の属性（性別、年齢、協力頻度等）に応じた協力依頼方法の確立

【献血の事前予約率】

	令和2年度 (目標)	令和2年度 (見込み)	令和3年度 (目標)
全血献血	10.3%	8.8%	33.7%
血漿成分献血	50.0%	58.9%	70.0%
血小板成分献血	65.0%	65.1%	80.0%
全献血者に占める 予約献血者の割合	25.0%	26.3%	50.0%

【ラブラッドの予約画面】



⇒ 全献血者に占める予約献血者の割合を50%に向上させ、予約制の定着を目指す

(エ) 若年層を中心とした献血の普及・啓発

- ・献血つながりプロジェクト「みんなの献血」の展開(通年)
- ・「はたちの献血」キャンペーンの実施(1月、2月)
- ・オンライン授業の定着を踏まえた新規献血者の獲得策の強化



輸血経験者であるタレント友寄蓮さんによる
オンラインセミナーの実施(予定)

⇒将来の献血基盤となる10代、20代の献血者数の増加を目指す

(才) 献血の社会的重要性の認知度向上に向けた広報活動

- ・輸血を受けた方やその家族の声を閲覧できるシステムの拡充
- ・献血血液が輸血用血液製剤に加え、血漿分画製剤の原料としても使用されていることの周知

【輸血を受けた方の感謝の声(ラブラッドな声)】

【血漿分画製剤の必要性を訴える医師の声】

ラブラッドな声

献血に助けられた人の声

輸血には大きな力があります！

7才

放射線治療

私の息子もその大きな力に支えられた一人です。
1歳30ヶ月の時に小児がんを発症した息子は、当時働いていた母や祖母に及んで放射線治療により、放射線治療を受けられないほどに状態が悪化していました。

輸血の経験

そんな時に初めての「輸血」を経験しました。
輸血を受けた息子の手足は温かさが戻り、その後の治療も無事に乗り越えることができました。
これからも献血をしてくださった皆様に感謝をしながら、息子とともに一日一日を大切に過ごしていきたいと思っております。


ヒトの血液から作られる免疫グロブリン製剤は、神経系の病気の治療に無くてはならないものです。特にギランバレー症候群(GBS)や、慢性炎症性脱髄性ニューロパチー(CIDP)・多巣性運動ニューロパチーは、現在、治療手段の中心になっています。

これらはいずれも免疫異常によって起こる末梢神経の病気で、手足の麻痺やしびれのため日々の生活を送ることが困難となりますが、免疫グロブリン製剤は、これらの障害の進行を抑え、症状の回復を促進します。

GBSは、呼吸をする筋肉の麻痺や自律神経障害により命に関わることもあり、早期の治療開始が必要です。また、CIDPでは繰り返しの投与や、維持療法も必要とされています。

患者さんの命を救い、生活の質の改善や長期的な身体機能の維持に必要な免疫グロブリン製剤のニーズは益々高まっており、日本国内での献血による安心・安全な免疫グロブリン製剤が安定的に供給されることを期待します。

千葉 厚郎先生
(杏林大学神経内科教授)



⇒献血を通じた社会貢献実感の向上や国民の献血への理解促進を目指す

ウ 期待される成果

- 事業環境の変化に対応した事業運営体制の確立
- 必要血液量の安定的、効率的、計画的な確保
- 将来の献血基盤を支える若年層献血者の増加
- 献血の社会的重要性の認知度の向上



新型コロナウイルス感染症治療への協力

- ・「特殊免疫グロブリン製剤供給体制整備支援事業」への参画
治療用の医薬品（回復者の血漿を原料とする特殊免疫グロブリン製剤）の供給に向けた国の取り組みへの協力

【日赤における主な協力事項】

- ・製剤の原料となる血漿の採取場所の提供
- ・新型コロナウイルス感染症の回復者からの採血
- ・採血された血漿の検査
- ・採血された血漿に関する情報の管理
- ・対象血漿の血漿分画製剤製造業者への送付



⇒国への協力を通じて、新型コロナウイルス感染症治療への貢献を目指す

(3) 供給部門における体制・業務の見直し

ア 背景・目的

■血液製剤の供給体制の合理化を通じた事業の効率化

【医療機関への血液製剤の供給の流れ】

医療機関からの製剤受注



対象製剤の出庫



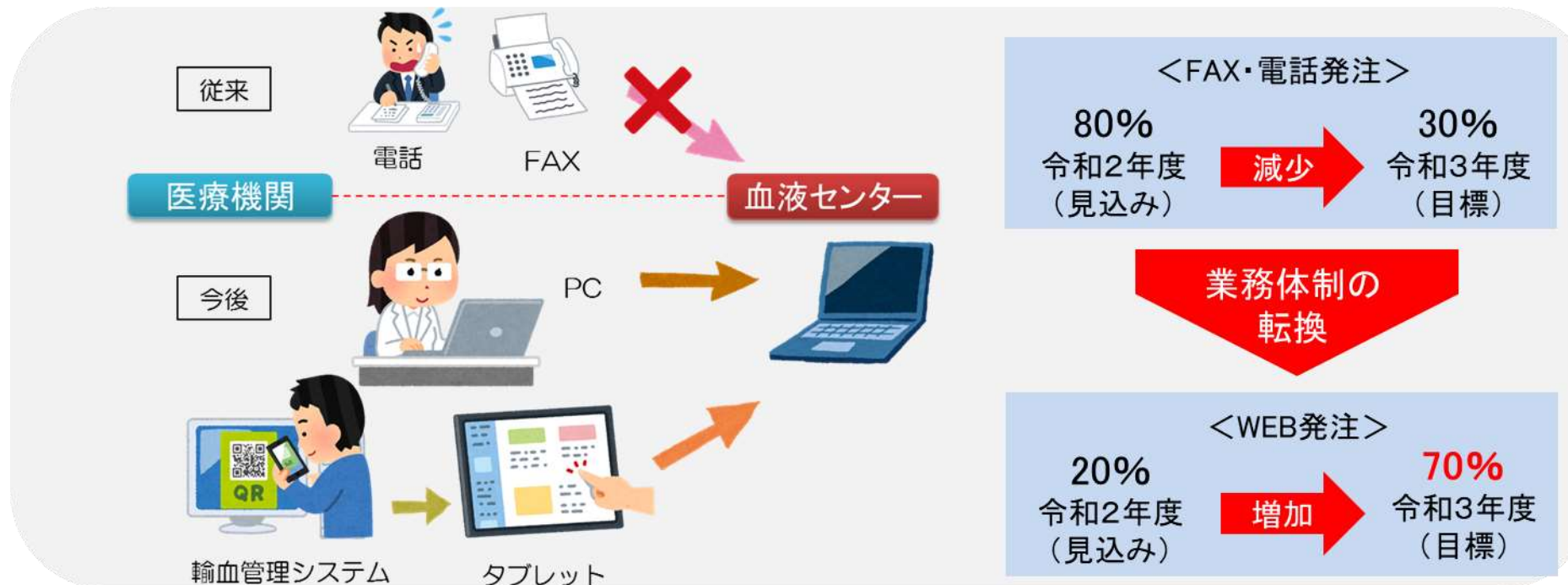
医療機関への配送



イ 施策の概要

(ア) 新たな血液製剤発注システムの利用促進

- ・医療機関の意見に基づく利便性を高めた新システムの利用促進
(医療機関向け広報資材の活用、簡易的な「発注マニュアル」の配付、タブレットの貸与)
- ・新システムによるWEB発注を中心とした業務体制への転換



⇒WEB発注の割合が70%に達することを目指す

(イ) 血液製剤の定時配送体制の確立

- ・輸血医療の実態を踏まえた配送体制への見直し
- ・医療機関に対する定時配送への協力依頼
(緊急を要しない配送依頼の定時配送化の促進)



【形態別の配送割合】

形態	定義	令和2年度における割合(見込み)	令和3年度における割合(目標)
定時配送	定時出発の配送便による計画的な配送	75%	増加 → 80%
随時配送	定時配送以外の不定期な配送	22%	17%
緊急配送	医療機関からの緊急配送の要請に基づく配送	3%	3%

⇒定時配送の増加により、定時配送率が80%に達することを目指す

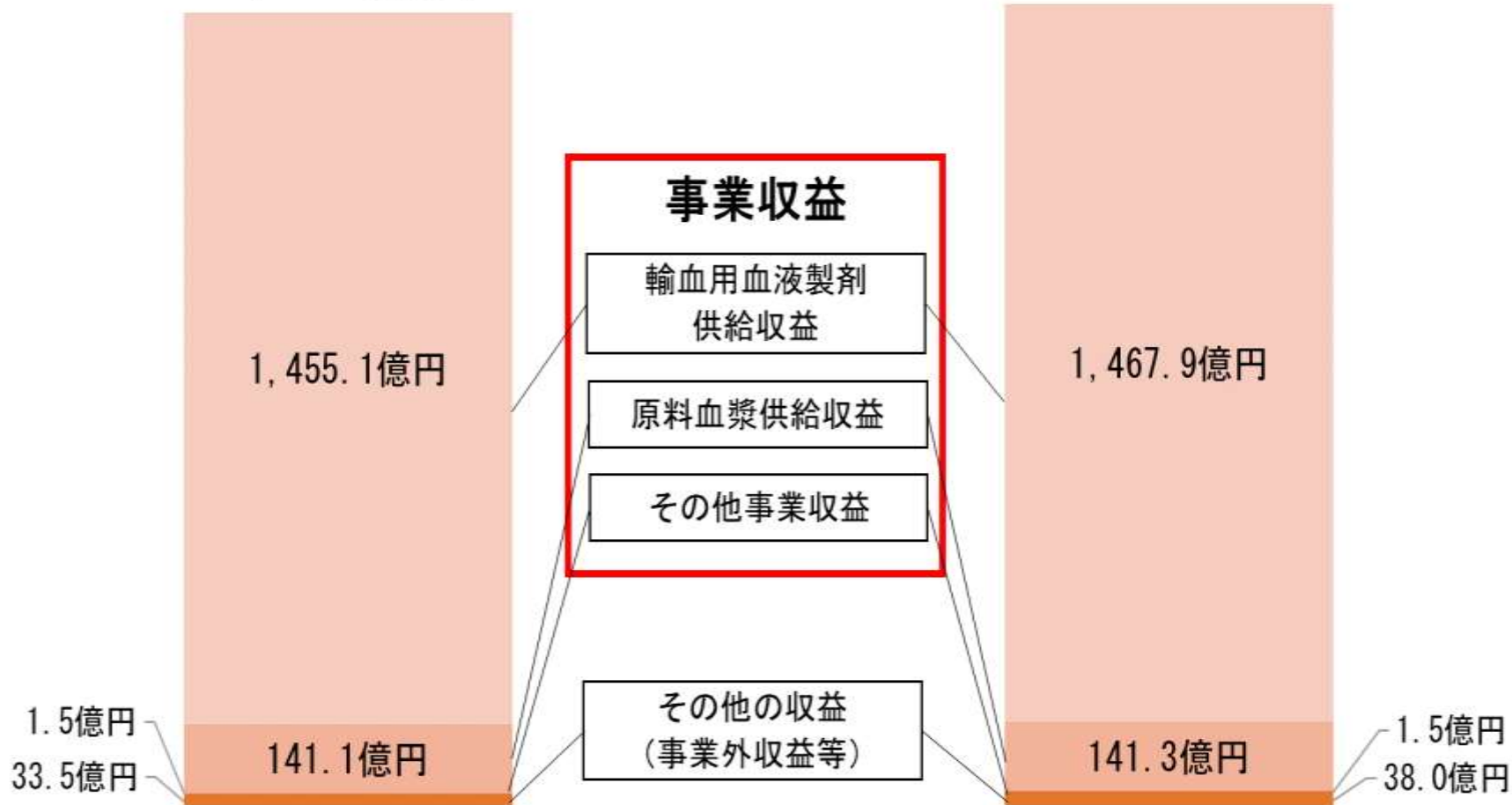
ウ 期待される成果

- WEB発注を前提とした体制への移行による受注業務の効率化
- 計画的な定時配送の増加による配送体制の効率化

4. 血液事業特別会計収支予算のあらまし(収益的収入)

1,631億円

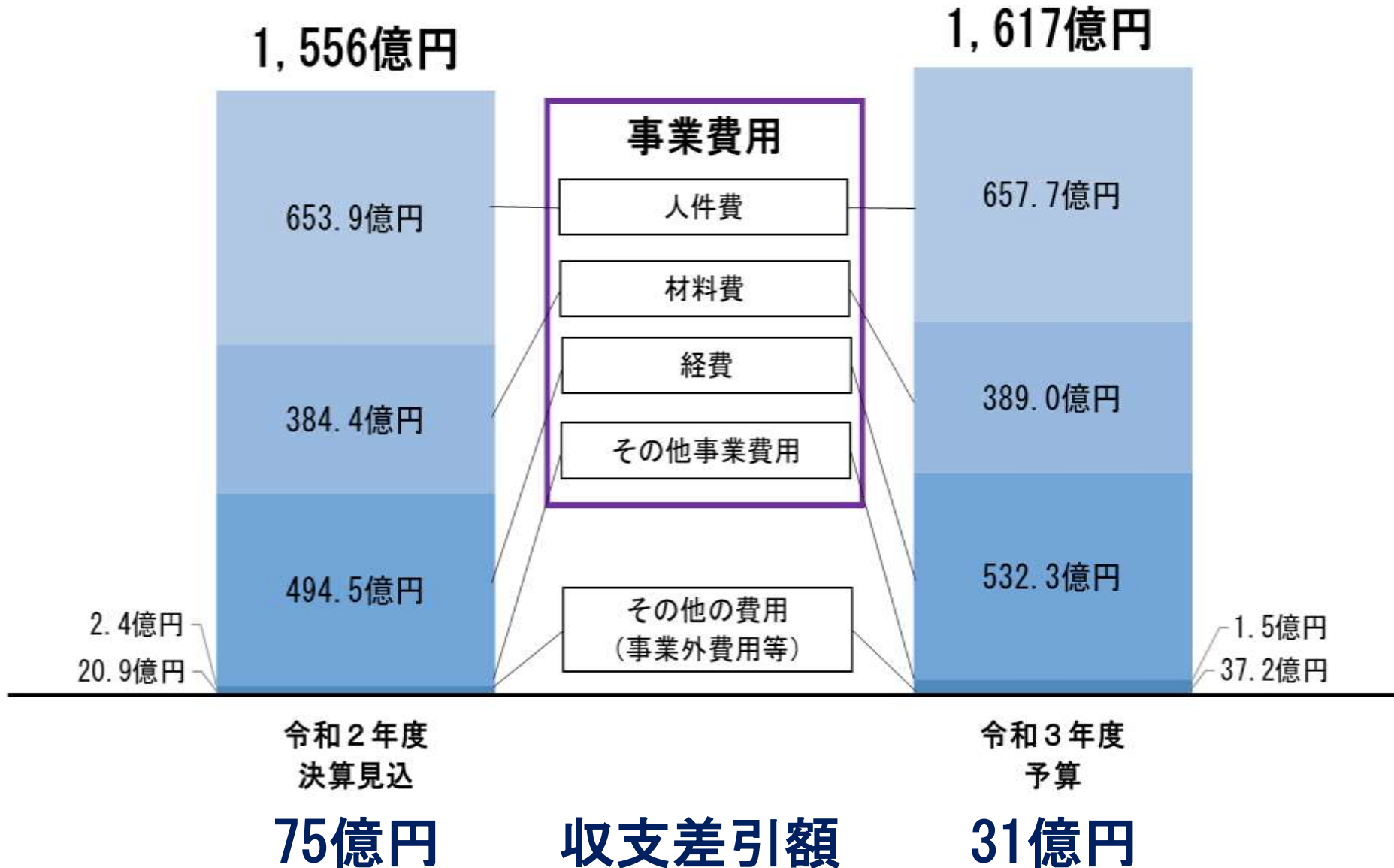
1,649億円



令和2年度
決算見込

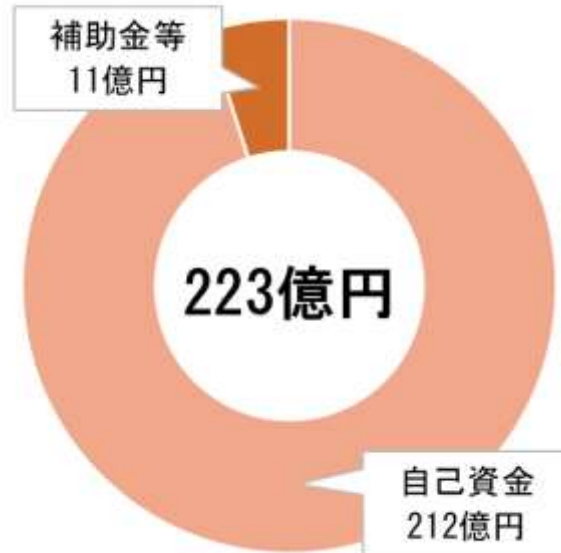
令和3年度
予算

5. 血液事業特別会計収支予算のあらまし(収益的支出)

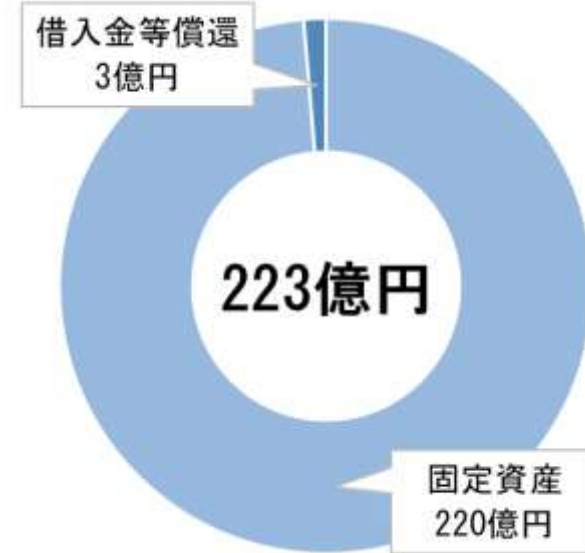


6. 血液事業特別会計収支予算のあらまし(資本的収支)

【収入】



【支出】



固定資産内容	金額
血液センター等の施設整備・改修	100億円
成分採血装置、全血採血装置、自動血球計数装置等の機器整備	57億円
移動採血車、献血運搬車等の車両整備	32億円
血液製剤発注システム及び献血推進・予約システムの機能充実 血液事業情報システムの仕様変更等のソフトウェア整備	31億円

7. 収支状況の推移

- 広域事業運営体制当初の平成24～27年度は、収支が悪化傾向にあったが、経営改善の取り組みにより、平成28年度以降は黒字に転じ、安定的な経営を維持している
- 令和3年度においては、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う事業環境の変化への対応を最優先課題としつつ、血液製剤の安全性及び品質の更なる向上、事業継続に必要な施設整備及びITシステムの導入等に対する投資を進めながら、安定的な事業運営を維持する

